

『イエスだと分かった』(ルカの福音書 24 章 13-35 節) 2021.4.11.

<はじめに> イエスは、よみがえったその日の午後、エルサレムから西へ約 11 km のエマオ村へと向かう二人の弟子に現れた物語です。近ごろエルサレムで起こった(18)ナザレ人イエスのこと(19)をイエス自身と語っているのに、彼らはイエスだとは気づいていません。

I イエスが分からない(13-24)

①姿が分からない(16)

二人はイエスの姿・声を知っていたはずですが、しかし、イエスが近づいて声を掛けられて、語らう相手がイエスだとはわかりません。「目はさえぎられ」とありますが、何が彼らの目を覆っていたのでしょうか。いずれにしても、彼らはイエスを見ても分からなかったのです。

②十字架が分からない(18-21)

二人はイエスの弟子(13)としてイエスに期待・信頼していました(21)。「行いにもことばにも力のある預言者」によって、彼らは生ける神を実感していました。そのイエスが「それなのに…十字架に」つけられて殺されるとは、理解・納得し難い結末でした。

③復活が分からない(21-24)

二人の混乱はそれで終わりません。殺され葬られたイエスの遺体が墓に見当たらないと仲間が知らせ、しかも御使いが現れて「イエスは生きておられる」と告げたと報告を受けます。他の仲間も墓に遺体がないことを確認し、彼らは困惑を抱えながら歩いていました。

II 聖書を開いて(25-29)

①イエスの予告(25-26)

彼らはイエスを預言者だと言います(19)。そのイエスは、自らの十字架と復活について予告していました(9:22,44,13:33,17:25,18:33)。しかし彼らはそのすべてを信じられません。ここから、心が「愚か」「鈍い」とはどういうことだと言えるでしょうか。

②聖書全体に書いてある(27)

「モーセやすべての預言者」は旧約聖書で、イエスを指し示しています(ヨハネ 5:39,46)。脚注には多くの箇所が挙げられています。主の十字架と復活は、数々の物語に予告として描かれ、律法の本質、聖徒たちの賛美と礼拝の対象であり、預言のテーマです。

③もっと知りたい(28-29)

イエスの聖書の解き明かしから、神のご計画と御業に二人の目は開かれて行きます。もっと聞きたい、語らいたいと思ひ、イエスに懇願します。起こり来る出来事の背後に働かれる神様が見えてくると、今まで見えていた景色も変わって見える経験があるでしょうか。

III 目が開かれて(30-35)

①パンを裂いて(30-31)

夕食の席でイエスはパンを取って祈り、裂いて彼らに渡されたその時、二人はそれがイエスだと分かります。何が気付くきっかけだったのでしょうか。彼らが信頼し期待していたイエス、十字架で殺されたイエスが、確かに今生きておられることを確信した瞬間です。

②姿が見えなくなった(31-35)

イエスだと分かった途端、その姿が見えなくなりました。再び分からなくなったのでしょうか。彼らはすぐにエルサレムに戻り、仲間たちにイエスがよみがえられ、確かにお会いしたこと、今も生きておられると証します。見えずとも信じる者と変えられました(ヨハネ 20:29)。

③心が燃やされる(32)

聖書が開かれる時、そこによみがえられて今も生きておられるイエスに出会えます。私たちが歩む道に、主イエス自ら近づき、ともに行き、語らい、この世界を続べ治められる神がおられ、私たちを愛し、支え、導いてくださることを示され、心は燃やされます。

<おわりに> 現実生活の中で、多くの人は「神は見えない。だからいない」と言います。私たちもその波に呑まれそうになります。聖書を通して、また主を信じる仲間を通して、生ける神、よみがえりの主にお会いでき、お互いの信仰が励まされますように。(H.M.)